

第 45 回目 新しい人を身に着る (17)

—麗しき主にある友情—

キリストを恐れ尊びながら、友として仕え合うというかかわりに生きる

はじめに

●今回は、「キリストを恐れ尊んで、互いに従う」というテーマの最後のメッセージです。クリスチャンの家庭の家族関係における新しいかかわりをこれまで学んできました。夫婦の関係、そして親子の関係、そして今回は、それ以外の関係—特に、主従関係にある主人としもべの関係—に目を留めたいと思います。現代、奴隷という制度はなくなりましたが、この手紙が書かれた当時の社会は、奴隷がいて当たり前の時代でした。多くの奴隷たちによって支えられている社会構造です。国と国とが戦争をして、その戦争に負けると相手の国の奴隷として生きざるを得ませんでした。ひとたび奴隷になれば、その家系は奴隷の家系となりました。しかも奴隷の人格は認められておらず、家畜と同様に扱われ、役に立たない奴隷は主人の意のままであったのです。煮ても焼いてもどのように扱っても法的に問われることはありませんでした。

●ところが、そうした社会の底辺にキリストの福音が浸透していったとき、次第にその社会構造を底辺から崩して行ったのです。なぜなら、多くの奴隷たちがキリストを信じる信仰をもつようになったからです。ローマ帝国が滅びた原因はいくつかありますが、その理由の一つとして、その社会を根底から支えてきた奴隷層に大きな変化があったからです。その奴隷たちの主人たちもキリストの福音に触れる者があられ、その主人もキリストを信じるようになりました。新約のピレモンへの手紙はその良い例です。

●キリストの福音は、夫婦関係に、親子関係に、そして主人と奴隷との関係に大きな変革をもたらしました。夫婦、親子というのはいつの時代でも社会を形造るかかわりの根幹です。また、家庭の中に存在する主人と奴隷との関係も社会の根幹的部分と言えます。その部分に、大きな変化をもたらした—それが、キリストの存在だったのです。そのようなことを念頭に置きながら、今回のテキストを読んでみましょう。

6:5 奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。

6:6 人のごきげんのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、

6:7 人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。

6:8 良いことを行なえば、奴隷であっても自由人であっても、それぞれその報いを主から受けることをあなたがたは知っています。

6:9 主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたとの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。

●ここに出てくる「主人と奴隷(しもべ)」のかかわりを、教会における主従関係にある者として拡大して考えてみましょう。たとえば、牧師と信徒という立場、リーダーとその群れ、つまり、神から何らかの責任をゆだねら

れている者とその者に従う者の関係です。教会も神の家族ですから、その枠は間違っていないと思います。使徒パウロとそれぞれの教会にある聖徒たちの関係も、新しいキリストにある「主人としもべの関係」と見ることができると思います。

1. 人格の尊厳という大前提

●もう一度、キリストにある新しい家庭のかかわりの大前提を見てみましょう。それは、

① 5章21節にあるように、「キリストを恐れ尊んで互いに従う」ということが大原則です。「互いに従う」ということは矛盾した表現です。なぜなら「従う」ということは、そこに主従関係、権威と従順、上下関係という秩序が前提とされているからです。ところがこの矛盾した表現が実は重要なのです。つまりキリストにある新しいかかわりを示唆しているのです。これまで何度も見てきましたが、この「互いに従う」という表現をさまざまな聖書の翻訳で見ると、

② それは互いに「仕え合うこと」であり、「ゆずり合うこと」であり、そして「相手を立てること」だということが分かります。－これは、全く新しいかかわりを教えるものです。

③ そしてその意味するところを、一言で言うならば、「人格の尊厳」ということに尽きます。親子関係において、この「人格の尊厳」ということを考えて行く時－特に、子どもの人格の尊厳ということをもどのように受けとめるかが大切です。それは、「子が、決して親の所有物とされることなく、また、親の夢を実現する道具とされることもなく、あくまでも、神からゆだねられた存在として認められ、やがて子が自らの意思で、人として自立していく権利が尊重されるということ」です。

●親の責任とはあくまでも、神からゆだねられた子どもが、自分とは異なる人格を持つ存在であることを理解することです。たとえば、子どもが自分の意思を表すことに対して、つまり、「いやだ」ということばを慎重(……)に受けとめることです。それを、単に、反抗しているとか、わがままだとして、親の面子を立てるために、断固として子どもをねじ伏せることがないようにすることです。特に、3,4歳時に見られる反抗期は、やがて思春期に訪れる本格的な反抗期の予兆です。親は力で子どもを無理やり降伏させてしまうことができます。そうした支配のもとで育つ子どもは、やがて精神的に大きな問題を引き起こすことが報告されています。

●子どもを守り、管理することは親の責任ではありますが、子どもが失敗する余地を残しておくことが大切なのです。なぜなら、人は失敗する経験を通して成長し、多くのことを学んでいくからです。成熟していくからです。それが親によって過度に支配され、管理されることによって、失敗すること、挫折することに弱い人間が作られてしまいます。舟山さんの長男が一流大学入試の失敗から家庭内暴力がはじまったのは、失敗や挫折の経験をさせてこなかったことが原因です。失敗をあえてさせることは、やがて、その子が新しいことにチャレンジしたり、冒険したり、創造的なことをしていくために必要な訓練なのです。

אגרת שאול אל האפסים

● そのように考えてみると、子どもの「反抗期という人生のプロセス」は、神様が子どもに対して与えている「人格の尊厳」が親によって脅かされることがないようにとの、神からの警告、警鐘のように思えてきます。親が、このサインを正しく受け止めることができるならば、子どもは健全な成長をとげることができ、やがて、親も子から尊敬されることになるはずなのだと思います。しかし、このことが正しく受けとめ切れない所に、家庭における親子関係のさまざまな問題が発生してくるようです。

● こどものクーデターは、非行、家庭内暴力、あるいは引きこもりといった形で表わされます。こうした事態が起らないようにパウロは警告しています。「父たちよ。子どもを怒らせてはならない」(6:4)と。この警告こそ、子どもの人格を尊重しなければならないということの意味なのです。

● 自分とは異なる人格を持つ存在であることを理解することは、夫婦関係にも言えることです。長く夫婦として過ごせば過ごすほど、自分とは全く異なる存在ということにますます気づいてきます。特に、それは相手の嫌な部分を通して見えてきます。はじめは相手に改めてもらうように言うのですが、やがて半ばあきらめて、人格の尊厳の「そ」の字もなく、夫の定年と同時に離婚を突き付けるということが増えているとか。

● 夫に対する妻の離縁宣告—これは妻のクーデターです。このクーデターがこれから団塊と言われる世代に起こってくると言われていますが、そうならないためにも、「夫は自分の妻を自分のからだのように愛さなければならない。」と警告しています。ことばを換えて言うならば、「あなたの妻を輝かせよ。」ということだと信じます。自分とは異なる人格を持つ存在であることを理解することは、主にある主従関係—牧師と信徒—にも言えます。主人の立場にある者へのパウロの警告は、「おどすことをやめよ。」です。権威を傘に脅していけない。もしそうするならば、信徒たちのクーデターが起こります。それは牧師を罷免するか、教会を去るという形で現れます。大方、教会を去るということで表わされますが、そうならないためにも、共に歩むべき者に対する人格の尊厳が重んじられなければなりません。

2. しもべであると同時に、友であるという不思議な関係

● 「互いに従いなさい」ということは矛盾する表現だと言いましたが、今回は、もう一つの矛盾する表現、不思議な関係をあらわす表現について、目を留めてみたいと思います。

① 「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」

② 「わたしはもはや、あなたがたをしもべ(奴隷)とは呼びません。わたしはあなたがたを友と呼びました。」

③ 「しもべ」と「友」・・・これは「あり得ない」関係です。あり得るとすれば、実に不思議な関係です。

④ 聖書における「しもべ」と「友」

● 「しもべ」とは神に仕える者のことですが、神ご自身から「神のしもべ〇〇」と言われることは最高の名誉です。なぜなら、聖書においては「神のしもべ」とは人につけられる最高の称号でした。聖書では、律法を代表する「モーセ」、イスラエルの王を代表する「ダビデ」がそれぞれ「神のしもべ」と呼ばれていますが、そして新

אגרת שאול אל האפסים

約の使徒を代表する「パウロ」は自らを「神のしもべ(奴隷)、キリスト・イエスのしもべ」と呼んでいます。それは神の恵みによって神に仕える者とさせられたからです。このことを彼は忘れることはありませんでした。

●一方、神から「神の友」と呼ばれた者がいます。それはアブラハムです。信仰の父と呼ばれていますが、アブラハムは神のためになにか大きな偉大なことをしたわけではありません。なにもしませんでした。ただ、神を信じた人です。このアブラハムに神はご自分がしようとしている救いのご計画を示されました。「友」として、です。これこれの律法を守れということもありませんでした。神との親しい信頼のかかわりを持つことが彼の召しであり、生涯の課題でした。彼がなしたことは、信仰によってイサクを生んだことでした。しかもたったひとりです。たいした業績のように思えませんが、神はご自身の心のうちを明かす「友」となってほしかったのです。信じ合える関係を求められたのです。

●イエシュアが弟子たちに、「わたしはもはや、あなたがたをしもべ(奴隷)とは呼びません。わたしは あなたがたを友と呼びました」と言われましたが、「友」とはどんな関係なのでしょう。聖書の中には「ダビデとヨナタンというすばらしい友情」が記されていますが、友情とは、相手の人格を尊重し、決して、相手を搾取したり、束縛したり、支配したりするような関係ではなく、あくまでも、「相手が輝いていくような支えとなる関係」を言うのだと考えます。このような友情をもった「しもべの姿」こそ、エペソ書6章で語られている事です。

●この世においては、使徒パウロがキリストのしもべだと自己紹介しているように、私たちはキリストのしもべです。そのことに誇りを持つべきです。しかし、同時に、キリストにある友です。「友」として仕え合うことーこれがキリストにある全く新しい関係なのです。

●最後に、もう一度、今回のテキストを読み返して、終わりにしたいと思います。

5 奴隷たちよ。あなたがたは、(あなたがたを友と呼んで下さった)キリストに従うように、
恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。

7 人ではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。

主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。

●権威を傘に威張ったりするのではなく、また、それを傘に着て脅すようなことをせず、イエシュアが弟子たちの足を洗ったように、あなたがたもそのようにしなさいという仕え合う精神の中に生かされるものでありたいと思います。